

経済・経営行動を促す圧力の諸相

岩田奇志

1 問題の出発点

筆者は、先にマレーシアにおける3つの主要なエスニック集団、すなわち、マレー人・中国人移民・インド人移民の企業経営行動についての比較分析を行った⁽¹⁾。大変興味深いことに、これら3つのエスニック集団の経済行動・経営行動のパターンは明白に異なっており、こうした経済・経営行動の成果にも大きな差が見られる。マレーシア独立以前のマレー半島では、宗主国英国の自由主義時代の政策が強く反映されており、各エスニック集団は、もし望むならば、かなり自由に経済行動・経営行動を展開できた。にもかかわらず、マレーシア独立時までに、次のような大きな経済格差が生まれていたのである。

2 独立期における各エスニック集団の経済的位置

1) 3重構造の一翼を担ったといわれる中国移民

独立当時のマラヤの経済構造を Silcock は、「3重構造」(three-fold economy) と名付けている。その実態は、(1)ヨーロッパ人による近代的な大規模資本経済、(2)中国人による前近代的な中小規模の資本経済、(3)資本という概念ではとらえられないマレー人の生存経済である⁽²⁾。

2) 中国人移民の投資額

中国人の行った投資の額は必ずしも明確でなく、様々な推計が行われているが、しばしば引き合いに出される Callis の推計によると、1937年における中国人の投資額は約2億米ドル、その他の外国人投資額は4億5450米ドルで、中国人の投資は、英国人のそれに次いで、全外国人投資の約3分の1を占めたとされる⁽³⁾。

3) マレー人・インド人の経済的地位 (1953-1957年における全商工業部門の調査)

これに対して、マレー人の経済力は、1950年代に至っても、

- (1)登録企業数8万9000の内、マレー人の企業数は8,800、全体の10%を切っている、
- (2)総資本金額4億ドルの内、マレー人の資本は450万ドル、全体の僅か1%である、
- (3)1958年に所得税を納付した3万3000人の内、マレー人は3,000人である。納税者の全体の約9%、金額で4%にすぎない。その納税者の殆どは政府の役人である⁽⁴⁾。

マレーシア独立当時、経済活動におけるマレー系の比重はこのように小さかった。1957年の国勢調査によれば、マレー系の73%は第1次産業に従事しており、ごく少数のものが、公務員・警察・軍隊などの職業についている。その他は不熟練労働者であった。当時マラヤ総人口の11%を占めていたインド人は、その大部分がゴム園の労働者であり、ごく少数が、商業、金貸しなどに従事していたにす

ぎない⁽⁵⁾。

4) 本稿の意図

本稿は、筆者がかつて行ったマレーシアにおける経済・経営行動にみられるエスニック集団間の大きな違いとその背景について検討した論文『マレーシアにおけるエスニック集団の企業経営行動：比較分析—価値観と「リソース」の役割—』（2003年度博士学位請求論文）の理論的側面を改善するために、いくつかの理論的課題を選んでその展開を図ろうとする努力の一つである。したがって、これはマレーシアの現実そのものの分析ではなく、その意図は、より広く適用できる分析ツールを改善したうえで、これをマレーシアその他の「実態」の分析に改めて適用し、これまで行ってきた分析をより精緻化しようとするものである。マレーシアの分析で得られた材料を各所で使用したのは、マレーシアの分析から得た理論的な枠組みの意味づけに役立てようとしたもので、本稿はマレーシアの「実態」の分析ではないことを明記しておきたい。マレーシアの「実態」分析および「実態」に関わる統計データについては、前掲論文をご参照頂きたい。

3 経済格差を生み出した背景

このような大きな経済格差を生み出した理由はなにか、これが筆者の問題意識の出発点であった⁽⁶⁾。筆者が着目したのは、これら3つのエスニック集団が当時さらされていた「生存圧力」の間に見られる大きな違いであった。

それは、環境の「圧力」が、人々をどのように経済・経営行動に駆り立てたかという問題である。ここで「圧力」を「人々にある行動を促す心理的衝迫」、「生存圧力」を「環境要因が生存を脅かすと感じられて生ずる行動への圧力」と定義しておく。

ここでのさしあたっての重要論点は次の3点である、すなわち、マレーシア独立以前のマレー半島では、

- ① 厳しい生存環境のもとにあった中国人移民が、必死の努力によってその経済的地位を次第に向上させていったこと、
- ② 比較的生存条件に恵まれたマレー系先住民（以後マレー人と呼ぶ）やインド人移民は、これとはかなり異なる行動を取ったこと、
- ③ しかし、経済的成功によって生存条件が次第に改善され、緩和されていったにもかかわらず、中国人移民の多くはその努力をゆるめることなく、今日に至るまでそのたゆまぬ努力を継続しつつあることである。

以上の観察を理解するためには、筆者がこの問題と出会ったマレーシアの歴史状況についての若干の説明が必要である。

4 3つのエスニック集団を取り巻く環境の違い

1) マレー人のおかれた環境と民族性の形成

1824年、英蘭条約でマレー半島は英国の植民地となった。当時は、産業革命開始後の発展の時期で、マレー半島の豊富な錫とマレー半島の気候に適したゴムへの需要が急速に増大していたため、大量かつ生産性の高い労働力が必要となっていた。

しかし、当時マレー半島の人口は少なく、また彼らの労働意識はきわめて低かった。温暖で恵まれ

た自然条件の下で栄養豊富なバナナなどがよく育ち、魚も豊富で、年中米作に適する土地柄であったために、生存が脅かされるような危機に見舞われることは少なかった。このように恵まれた条件のため、マレー人には、知恵を絞って必死に生きることが必要でなく、また季節の変化が単調で、年中米作りができる（いつ種を播いても同じように収穫できる）といった環境の中で、時間への鮮明な観念や計画性、工夫の習慣は育たなかった。このためマレー人は働くことを好まず、ゆったりとした気楽な農村生活を望んだ。鉱山や工場での過酷な労働を望まなかったことはいうまでもない。彼らの約80%は農村に住んで自給自足的な生活を営み、英語教育を受けたごく少数の都市マレー人が、公務員・警察官・軍人などになった⁽⁷⁾。

このような状況のもとで、イギリス植民地政府は、植民地経済の開発のために必要な労働力を、主として中国・インドからの移民に頼った。ラッフルズはじめ歴代総督は、植民地建設に必要な労働力を主として中国人に求め、彼らの入国を歓迎する政策をとった。

2) 手厚く保護されたインド人移民

インド人移民を大量にマラヤに導入した契機は、1900年以後始まったイギリス資本によるゴム・プランテーションの増加である。

インド人移民が中国人移民と大きく異なる点は、インド人移民は当初から政府によって手厚く保護された、政府の補助移民であったことである。

こうして大きなエステートでは、住宅・保健・教育・育児・娯楽など福祉施設も法的な規制によって完備されていた。1955年の労働省の年次報告（Annual Report of Labour Department）は、エステートの状態を次のように表現している。すなわち、「エステートは、自身の店舗、ヒンズー寺院、演劇場、そして、今日ではしばしばラジオや映画館をもつ自足的な社会である」⁽⁸⁾。大きなエステートは、インド人移民の労働者の子弟のために、タミール語の小学校をも創設している。

このように、保護された労働環境に長くとどまるといふインド人移民の性格は、今日まで維持されており、同じ工場でも20年間まじめに働くという行動形態として、今日に引き継がれている⁽⁹⁾。重要な点は、このような保護は、中国人には適用されなかったことである⁽¹⁰⁾。

3) 中国人移民のおかれた環境条件と労働者としての特質

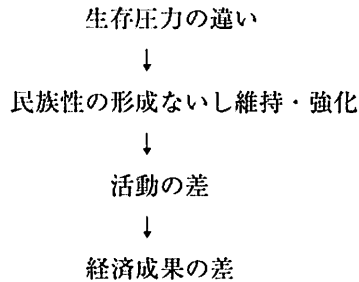
マレー半島の開発期に、その労働需要に応じてマレー半島に流入した多くの中国人の出身地は、福建、広東、海南などの中国東南沿海地方である。この地方は山地が多く、人口増加によって耕地が極度に不足していたため、余剰労働力が大量に蓄積されていた。また国内の政争による戦火にしばしばさらされるなど、人々は常時生存の危機にさらされていた。

植民地開発の労働力として導入された中国人は、厳しい「生存への圧力」のもとで、安い賃金にも我慢して懸命に働き、様々の困苦にも耐えた。彼らの中には、ゴミ拾いなどの卑しい仕事から始めて、必死に生活費を切り詰め小商売を始めるなど、次第に経済力を蓄え、その社会的地位を高めてゆく者が少なからず現れた。さらに目標の高い人々は、大きな成功によって「故郷に錦を飾る」夢を持ち、致富を求めて努力した。このように徒手空拳、極貧を味わった中国人移民の多くは、儉約精神と計画性に優れ、チャレンジ精神・競争心が旺盛で、仕事を工夫することには特に熱心であった。困難を克服する彼らの能力は高く、鉱山労働者から自立して商業を始め、そこから様々な産業に転換、発展を続けた者も少なくなかった。彼らには、常に収益性の高い仕事を求める強い志向が見られた。

こうした3者の行動の違いは、先に見たように、3者の経済力に大きな差異をもたらした。

4) 「生存圧力」による説明

以上マレーシアの独立に至るマレー半島の歴史過程は、各エスニック集団のおかれた状況や民族的性格、その経済活動の特徴と成果について、興味深い意味連関を示唆している¹¹⁾。

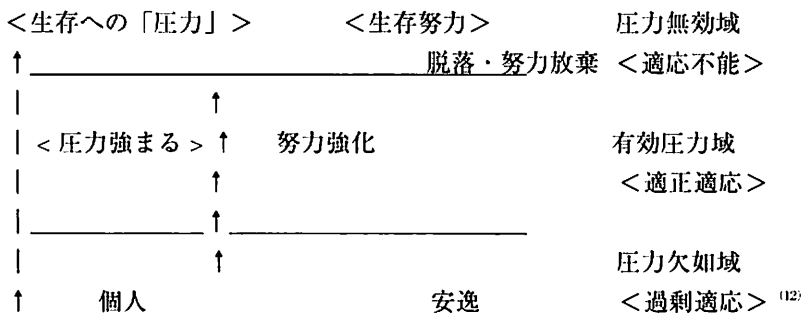


5 環境圧力と主体的努力の関係図式

この「生存圧力」による経済・経営行動の違いについての説明は、マレー半島における経済発展の初期にあつては、状況のある重要な側面についての説明になりうるものと筆者は考えている。

筆者は、「生存圧力」とそれがもたらす「主体的努力」との関わりについて、次のような基本的関係を設定している。

1) 基本的関係図式



2) 有効圧力域と適正適応

生存への「圧力」と人々の「生存努力」との間には、興味ぶかい関連が見られる。すなわち、生存への「圧力」が一定レベル以下（すなわち生存が容易）であると、多くの人々は、安逸に慣れ、苦しい努力を怠るようになりがちである。これはマレーシアの歴史に限らず、広く観察される傾向である¹³⁾。

この低い「生存への圧力」と「安逸」という図式は、農村で自給自足的生活を営んでいたマレー人によく当てはまる。マレー系は、独立当時でさえも、その約80%が、農村で安逸な生活を送っていた。それは、ある種の「過剰適応」であるといってよい。そして、長年にわたるこうした状況が、マレー人の民族性を形成ないし維持したものと考えることができる。

次に、「生存への圧力」が一定のレベルに達すると、人々はその「圧力」に応じて相応の努力をす

ようになる。これもわれわれが日常目にするところであり、特殊な場合を除けば、かなりの一般性を持っていると考えることができる。インド人移民も、手厚い保護のもとで、労働者として長年まじめに働くという行動形態を発展させていった。こうしたインド人移民の性格は、現代の工場労働にも引き継がれている。

これに対して、中国人移民の示した血のにじむような努力は、より高い「生存への圧力」のもとでの「努力の強化」とみることができる。

しかし、「圧力」がさらに高まると、人は、ついに目標を断念したり、努力を放棄したりするようになる。この場合、人々は、「適応不能」により社会的脱落者になったり、他の活動領域への脱出（または進出）（「選択適応」）を図るようになる。これも、われわれの日常の観察が支持するところである。努力を厭わぬ中国人移民も、マレー半島の長引く不況期には、生活の困難に耐えかねて続々と故郷に戻っている。様々な社会に見られるいわゆる「ドロップアウト」は、努力を放棄し生活の基準を劇的に変化させることによって、かろうじて「生存」を維持する人びとと見なすことができよう。世に「ホームレス」と呼ばれる人々の多くも、こうした「圧力」を逃れ、生活の基準を劇的に変化させたものと考えられよう。彼らへの対応が、単純な生活補助では成果をあげにくいのは、こうした生活原理の転換が大きくかかわっているように思われる。

このように、「圧力」の増大とともに努力の支出が増加する範囲を「有効圧力域」、脱落するほどに「圧力」が高い領域を「圧力無効域」、人々が安逸を貪るほどに「圧力」が低い領域を「圧力欠如域」と名づけておこう。

3) 「有効圧力域」に見られる個人差

この「有効圧力域」には、当然ながらそのレベルと幅に個人差があり、同じ「圧力」でも努力を始める者と気楽に「圧力」をやり過ごす者とがあり、またその上限においても、脱落するものと頑張つて努力を続けるものとが存在すると考えられる。このことは、たとえば、極貧に育ちながらそれゆえに厳しい努力を積み重ねて成功する者（いわゆるハングリー精神を発揮するもの）と、同じく極貧に育ち、当初から苦しい努力を放棄する者とが現れるなど、貧困のもたらす相反する2通りの影響という現象を説明するのに役立つ。もちろんこのような差の背後には、家庭で培われた価値観や生育過程における特異な体験がもたらした価値観などがあり、それらが「有効圧力域」のレベルと幅に大きく影響するものと考えられる。先の貧困の例で言えば、長年の貧困に打ちひしがれ、向上意欲を喪失した層と、たとえば没落階級の出身で家族のステータス復活の夢を追う者とは、要求水準と満足水準とが異なる場合が多く、したがってまた、同様の圧力のもとでのその行動も異なってくる。要求水準・満足水準が高い場合には、「圧力」がより高い状況のもとでも努力が継続されると考えて差し支えないであろう⁽⁴⁾。

4) 「有効圧力域」に見られる民族差と文化

ここで本研究にとって、関心の深い問題は、エスニック集団の間に、こうした「有効圧力域」のレベルと幅に、大きな差が見られるという事実である。マレーシアにおける3つのエスニック集団の歴史は、この問題について、大変興味ぶかい状況を提示している。

すなわち、マレー人に見られる民族的な型としては、有効圧力域の下限が比較的高く、環境の「圧力」がかなり高まらないと意識的な努力の強化が行われにくいこと、他方、有効圧力域の上限が低く、少し「圧力」が高まると努力や競争を回避して、自らの「サンクチュアリー」（農村のカンボンすな

わち村での気楽な生活)に逃げ込んでしまうという傾向を示している。マハティールは、マレー人のこうした傾向について次のように指摘している。

過去の歴史の中で、熟練したマレー人の金細工人(enact)がいた。しかし、中国人がマレー人より優れた製品を作り出すと、マレー人の顧客はなくなった。建築においても同様である。かつて木造建築においては、複雑な彫刻や建築技術を持ったマレー人の大工がいた。しかし、伝統建築と違った煉瓦やモルタルによる建築方式を学習しようとするマレー系はいなかった。その後、建築材の多様化と建築方式の複雑化で、マレー系は自力で建物を造らなくなり、中国人の大工にたよるほかなくなった。マレー人は中国人の到来でこのようにじわじわ農業以外の領域から撤退してしまう⁽¹⁵⁾。

つまり、彼らの場合、有効圧力域の幅が狭いことを示唆している。そして、このことは、彼らの宗教意識と深くかかわっている⁽¹⁶⁾。

また、中国人の場合、成功によってかなり「環境圧力」が減少した場合でも努力を継続する点から見ると、「有効圧力域」の下限が低く、比較的低い「環境圧力」のもとでも努力を惜しまないこと、(これには、後に検討する「理念圧力」の問題が大きくかかわっているものと思われる)、かなり上限が高く、高度な「圧力」に耐えて厳しい努力を継続する傾向が見られることから、「有効圧力域」の幅が広いといえることができる。

こうした「圧力域」の問題は、同一の社会にあっても、時代により環境によって変化するものと思われる。それは、日本の歴史に照らしても明らかであろう。しかし、反面、先に引用した各エスニック集団の歴史的事情は、それが、各エスニック集団の人生観、勤労についての考え方、ビジネスへの志向性などによりかなり深い影響を与えており、それが長く受け継がれてゆくことを示している。

6 「環境圧力」の意味の拡張と「理念圧力」の役割

以上のように、「有効圧力域」のレベルと幅のあり方は、エスニック文化や時代の文化状況と深く関わっており、次に見る「理念圧力」の問題とともに、文化と経済・経営行動とをつなぐ重要な結節点のひとつと見ることができよう⁽¹⁷⁾。

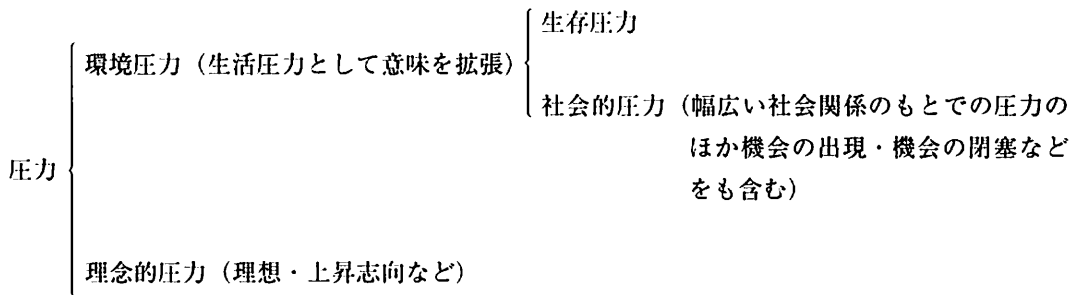
以上の説明図式は、各エスニック集団の経済行動・企業経営行動に見られる顕著な差をとりあえず説明することができる。すなわち、この現象を説明するうえでは、まず、環境の圧力が一定の役割を果たしてきたという事実は十分に意味があると思われる。しかし、にもかかわらず、歴史過程のその後の発展は、「生存圧力」がこのような大きな民族性の差を生み出すという考え方に、ある限界を突きつける。それは、厳しい経済活動の結果として、次第に経済水準が向上し、「生存圧力」からはかなり距離を置くようになった中国系の人びとが、相変わらずその厳しい努力の水準を維持し続けたという事実である。そこで我々は、歴史過程を、

- ① 生存への「圧力」が人びとを行動に駆り立てるという側面が、顕著に見られる段階、
- ② 経済活動の結果として、生存に関わる「環境圧力」が緩和されたにも拘わらず、厳しい努力が維持されたという段階、すなわち「生存圧力」以外の様々な「環境圧力」が人びとを行動に駆り立てる段階とに分け、その双方に目配りする必要に迫られることになる。

また、この段階では、「環境圧力」のほかに、どうしても主体が持つ価値観や理念に誘導され、主

体内部に生じた「圧力」（これを「理念圧力」と呼んでいる）の問題を考慮に入れざるを得ない。この「理念圧力」は、伝承した民族文化や宗教観が大きく関わっていると考えられ、ここに人びとの経済・経営行動と宗教との一つの興味深い接点が見られる¹⁸⁾。

こうして、「環境圧力」を「生存圧力」からより幅広い「生活圧力」に拡張するとともに、他方「理念圧力」と筆者が呼ぶ心理的圧力の重要性が浮かび上がる。「生存圧力」と区別される意味での「生活圧力」としては、たとえば、エスニック集団内部の競争意識や、家族を呼び寄せたいという希望、故郷に錦を飾る夢など、直接生存には関わらないが、人びとに強く行動を促す、社会的圧力を想定している。



7 環境条件の「内圧」への変換

このように考えると、「環境圧力」と「理念圧力」との関わりをどのように捉えるのかが問題となる。これらは単純に「外圧」と「内圧」として捉えるのが妥当であるかという疑問が残るからである。環境の圧力そのまま「外圧」として見ることができるか？環境諸要因は子細に見ると、内圧（心理的衝拍）と深く関わるが、「圧力」そのものではなく、それは結局、「生活行動」に関わる観察可能な条件の寛厳であるといえることができる。したがって、それ自身が心理的衝拍とイコールではない。それは、心理的衝拍に変換されうるものであり、

環境条件→変換→内圧（心理的衝拍）

という「変換」の過程が必要である。こうした環境条件をどのように受け止めるかが、個人、エスニック集団によって、また同じ社会でも時期によっても異なってくるのはこのためである。こうして我々は、「変換コード」の概念に行き着く。この「変換コード」を規定する要因は多様であるが、その主なものとしては、個人の価値観や生育環境、現在の家族・社会・経済状況、あるいはエスニック集団を取り巻く宗教、政治・経済状況、およびエスニック集団の心に深く浸透している宗教観念などが大きく関わっていると考えられる。

一例をあげると、改革開放以後の中国においては、国民的規模で「変換コード」が大きく変化したと考えられる。たとえば、毛沢東時代の中国と現代の中国では、たとえば「金銭収入の不足」を生存圧力として受け止める受け止め方が大きく変化しているというように、環境の厳しさに対する解釈の基準が一変している。

ここで注意したいのは、環境条件の厳しさだけでなく、「機会の出現」さえも「心理的衝拍」、「努

力への衝拍」を引き起こすという意味で「圧力」となることである。それらは、「他者に機会を奪われるのではないか」といった焦りや、「努力が失敗するのではないか」などといった危惧など、新たに様々な「圧力」を発生させる。重要な点は、「環境条件を圧力と感じ、それを心理的圧力に変換する受け止め方（「変換コード）」に、個人差・民族差が認められることである。

8 環境要因の「変換コード」と「理念圧力」

1) 「変換コード」の役割

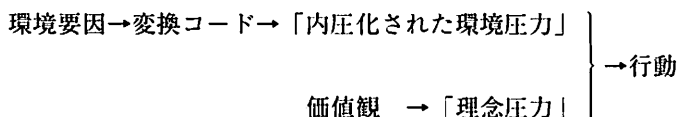
先に見た歴史過程が明らかに示しているように、マレーシアにおける3つの主要民族は、同一社会に棲息しつつ、それぞれ大きく異なる生存への「圧力」のもとに置かれていた。

まず、マレー人は、自然環境に恵まれ生存の危機に迫られることはなかった。しかし、実際には、彼らといえども、レベルの高い生活を営むには決して十分とはいえない生活条件の下にあった。一例を挙げると、マレー人庶民の住宅は貧弱で、家族数が多いにもかかわらず、その多くは普通2室の住居に居住していた。現代のマレーシアにおいても、こうした住宅の問題は、マレーシアの福祉における一つの緊急課題になっているという。この状況は、マレーシアに多いと言われる近親間の不適切な関係の一因とさえなっているといわれ、マレー人庶民の生活水準は、現実には決して満足できる水準のものではない⁽¹⁹⁾。

こうした彼らが、実際の生活水準は低くても、気楽な生活に満足していたという事実は、環境要素を選択・解釈して、行動への「圧力」を形成するうえで、独自の「変換コード」を持っていたということの意味する。これとは異なる「変換コード」を持つ民族であったならば、こうした状態には満足できず、それを厳しい「生活圧力」と受け止めて、状況を改善するための努力を開始していた可能性が大きいからである。マレー人に特徴的な「変換コード」によって、マレー人は環境の「圧力」を強く感じることなく、必ずしも満足な状況ではないためにある種の不足を感じつつも、「気楽さ」に浸った自然的・自給的な生活を好む結果となったといえることができる。この問題を説明するうえでは、「環境条件」と主体が感じている環境からの「圧力」との間には、環境要因から「圧力」への何らかの「変換コード」が介在していると考えるのが自然である。

2) 歴史過程が示す「環境圧力」と「理念圧力」との関係

この両者の関係は、次のように表現することができよう。



ここで、環境要因の「圧力」への「変換コード」は、環境要素を選択的に受け止め、その意味を解釈し、「圧力」として感じ取る基準である。この「環境圧力変換コード」には、個人の経験によって蓄積された基準だけでなく、民族的に伝承された文化が提供する基準もこれと深く関わっている。

このように考察を進めると、概念的には、

- ①「現」環境条件（「現」の幅をどうみるかは状況による）に起因する心理的衝拍（これも内圧の一種と見なされる）と
- ②長期にわたる環境条件によって形成された、思想・信条（宗教・文化）などに起因する心理的衝拍

(これも内圧の一種と見なされる)の2種類の「圧力」区別することができよう。しかし、現実には、それらは分別困難な形で結びついていることが多いと思われる⁽²⁰⁾。

このように「圧力」の概念を「生存圧力」から大きく拡大して、環境条件の「変換」によって生ずる「内圧」および価値観によって強く動かされる「理念圧力」の両者を意味するものと「圧力」の定義を変更したうえで、先に「生存圧力」のところで提示した「圧力と行動への図式」によって現実の過程を眺めると、「行動への圧力の諸相」がより一層理解できるように思われる。もちろんこの区別は概念的なものであって、これらをオペレーショナルに区別するのは困難であるし、またこれらを区別することは、現実にはそれほどの意味を持たない。

9 「進取的」反応行動と「防御的」反応行動

この問題に関しては、今ひとつ見落とすことのできない重要な問題がある。それは、「環境圧力」の増大に対しては2通りの反応行動が考えられることである。それは、

- ①圧力の増大に対しては、できるだけエネルギー（あるいは生活コスト、活動コスト）の支出を切り詰めようとする型の反応行動、すなわちエネルギー節約型の反応行動と
- ②圧力に対する生活条件、活動条件の改善を求めてエネルギーの支出を強化する型の反応すなわちエネルギー支出強化型反応行動との2つの「方向性の相反する活動」の存在である。わかりやすい例として、今日のような不況期に、多くの主婦が取る反応行動には、生活を切り詰める節約型の反応行動と仕事を求める強化型の反応行動とを挙げることができる。

不況の中で、しばしば鮮明に現れるように、環境圧力のもとで行動が促される場合、こうした方向性の異なる二つの努力を区別することは、環境圧力のもとでの経済・経営行動の理解を助けると思われる。これは、過重な圧力のもとで家庭を放棄し、たとえばホームレス型の生活に落ち込む場合（脱落）と、家庭を守るために、新たな収入の道を求める行動とともに、主婦が節約を強化したりする行動は、同じような形で広く企業の間にもみられ、これは明らかに「脱落」とは異なっている。マレーシアの例でみると、厳しい環境条件の下で、爪に火をともしような節約の生活とともに、極限近くまでエネルギーの支出を強化してよりよい収入の道を必死で求めた中国系移民の行動と、厳しい環境に直面したときに、エネルギーの支出を控え、シンプルだが彼らにとって「居心地のいい」サンクチュアリー（生活コストのかからない農村での気楽な自給自足的生活）に撤退していったマレー系の行動形態は、厳しい圧力のもとで行動を起こす場合にも、2つの方向性で見ると必要性を示している。マハティールは言う。

多くの中国人の流入によって、都市が急速に発展した。この中で、都市の物価や地価及び諸税は上昇する一方であった。マレー系は、こうした厳しい状況に臆せず立ち向かい競争することをひどく嫌い、これを避けようとした。このため、政府に雇用されたマレー人以外は物価の上昇に耐えきれず、不動産を売り払って、都市を出て、カンボンに居住するようになった⁽²¹⁾。

この時期、多くのマレー人たちは、あらたな努力を開始するのではなく、生活費が安く生活の楽な農村生活へと撤退していったのである。現実には、何らかの程度においてこの両者が組み合わされて活動が行われると考えられるが、その組み合わせは多様である。何が、この違いを決定するかは、大

変興味深い問題であるが、この問題の解明には、反応の対象となる「個々の圧力の性格についての分析」や「行動主体の個々の具体的条件についての分析」（文化・価値観の分析を含む）が必要であり、筆者にとっては、今後の課題として残されている。興味深いのは、この組み合わせが、エスニック集団によって大きく異なることである。

③以上のような2つの反応行動のほかに、今ひとつ、活動の舞台を転換することによって、増大する「圧力」に対応しようとする場合がある。たとえば、厳しい不況下で、苦境に陥った企業が、不得手な領域から撤退するとともに、得意分野に資源を集中したり、個人の場合にも、「圧力を避けてより有利な領域での職業に転換する場合」など活動の舞台を転換する場合がそれである。

筆者としては、これら3種の反応を、

①進取型反応

②防御型反応

③退転型反応

と命名しておく。

以上の検討は、環境および理念がもたらす、経済行動への心理的衝迫を中心に、問題を検討した。ここで今ひとつ示唆しておきたい問題に「吸引力」の問題がある。いわゆるプッシュに対するプルの側面である。すなわち、生活上のさまざまな誘引、魅力的な収入や昇進、社会的評価など生活上の吸引力（「生活吸引力」）、理想実現の魅力など理念上の吸引力（「理念吸引力」）の存在である。この吸引力と圧力とは、現実には分かちがたく結びついて現れることが多く、いわば行為者の感じ方の問題であるが、概念的には区別しておくことは有用であると思われる。この両者の関係については、今後の検討に待つこととしたい。

今ひとつ、こうした諸圧力に基づく努力が、経済・経営活動へとチャネリングされる仕組みについては、本稿では扱っていない。この論文は、「圧力の諸相」に焦点を当てた分析枠組みをあつかったもので、ここにチャネリングの問題を入れると焦点がぼやけるおそれもあり、ここではこの論点導入の必要性和、前掲論文の該当箇所を注記するにとどめたい。¹²²⁾

今後の課題

以上の叙述は、「環境圧力」と経済・経営行動とのかかわりに関する筆者自身の思考の発展過程を分析的に示したものである。こうした分析枠組みは、人びとの経済・経営行動との関わりのみならず、大小様々な事象の分析に役立つかもしれないと今考えている。たとえば、大きくは一国ないし一文明の興隆や衰退の分析に役立つ場合が考えられる。一例をあげると、19世紀後半の東アジアにおける西洋列強の圧力に対する、日本、中国、朝鮮の反応の違いが、その後の歴史の歩みに大きな違いを生み出したことが思い浮かぶ。また、同じく厳しい環境圧力のもとでの企業組織の行動が、企業によって大きく異なるという興味深い問題の分析などである。また身近なところでは、厳しい環境圧力のもとでの大学改革のあり方や子供の教育の方向（子供たちを学習で競わせるか、協力して学ばせるかといった問題—犬山市が全国テストを拒否したことで脚光を浴びている問題）、受験や学習に関わる子供の反応やそれへの対応、などなど、様々なテーマが考えられる。本稿は、こうした広がりを持つ一つの分析枠組みについての、筆者自身の考え方の展開過程を、筆者なりに再考・整理したものである。今後こうした視角から、経済・経営行動の具体相、およびそれをめぐる様々な問題について検討した

いと考えている。

注

- (1) 岩田奇志「マレーシアにおけるエスニック集団の企業経営行動：比較分析価値と「リソース」の役割（2003年度名古屋大学博士学位請求論文）。
- (2) Silcock, T. H. *The Economy of Malaya*, Singapore, 1954. 1頁；松尾弘「第4章 経済開発上の問題」より引用、松尾弘編『調査研究報告双書 マラヤ・シンガポールの経済開発』アジア経済研究所1962年、240頁。
- (3) 松尾弘「第3章 マラヤの経済と華僑」；調査研究報告双書第8集『マラヤの華僑と印僑』アジア経済研究所、1961年、136頁。
- (4) 前掲松尾弘「第4章 経済開発上の問題」；松尾弘編『調査研究報告双書 マラヤ・シンガポールの経済開発』、253頁。
- (5) 前掲松尾弘「第4章 経済開発上の問題」；松尾弘編『調査研究報告双書 マラヤ・シンガポールの経済開発』、239頁。
- (6) 筆者は当初、これら3つのエスニック集団がそれぞれその影響下にある文化に着目し、それによって経済・経営行動の違いを説明することを企てたが、特に影響の大きい文化要素を直接行動パターンと結びつけることにはあいまいさが伴うこと、むしろ行動パターンとかわるより普遍性の高い行動原理およびその範囲内での行動の違いと文化とを結びつけることによって、3つのエスニック集団に関して、個々ばらばらにではなく、より統一的な説明が可能になると考えるにいたった。本稿では、こうした行動原理とその枠内での行動パターンの違いを比較する場合の枠組みとして、環境条件が心理的圧力に変換される変換コードおよび内心の「理念圧力」を取り上げ、これと文化とを関連付けることによって、文化と、経済・経営行動との関わり方について分析した。
- (7) シャーノン・アハマトの小説『いばらの道』(*Ranjau Sepjang Jalan*, 1966. 小野沢純訳、井村文化事業社、1981年)にはマレーシアの農民たちには、それなりの困難も存在したことが、興味深く描かれている。農民たちがおそれたのは、台風やそれがもたらす洪水、干ばつなどの天災、ムカデ、蛇（コブラなどの毒蛇）猛毒を持つサソリなどがもたらす病気、稲に害をなす白い小ガニやネズミ、イノシシ、稲盗人などである。
- (8) 嶺学「雇用と労働市場」、船橋尚道編『調査研究報告双書第42集 マラヤ・インドネシアの労働事情』、アジア経済研究所、1963年、44頁。
- (9) マラヤへ移住したインド人のうち北部インド地方の出身者は比較的少数で、このうちパンジャービー及びシーク人は、エステートの監視人や巡査として雇われるものが多かった。一般的にいって、北部インド出身のインド人移民は、小都市の商業、金融業に多く従事していた。インド人の商人は、都市の中心地に組合を結成して自己の商業的利益を守ろうとしていた。また北インド人移民の中には、少数ながら弁護士や法務官もおり、政府機関の下級職員や警察官を勤めるものもいた。須山卓「マラヤの印僑社会と経済」(調査研究報告双書第8集『マラヤの華僑と印僑』アジア経済研究所、1961年、294-330頁)を参照。
- (10) 中国人労働者、インド人労働者のマラヤへの移住の歴史は、インド人移民社会と中国人移民社会とが、重要な点で大きく異なっていることを示している。Emersonは、インド人労働者については、政府が多くの法律を通して労働条件から生活条件まで終始行き届いた管理を行うこと、中国人労働者に対しては、政治活動の取り締まり以外、放任する方針をとっていたことであると述べている。さらに、このようにエスニック別に寛厳を異にしているのは、中国人の多くが自力でことを処する上でインド

人より遙かに能力があり、政府の取り締まりを歓迎せず、むしろ激しく拒否するだろうと推察されたからである」と指摘する (*Malaysia: A Study in Direct and Indirect Rule Company*, The Macmillan Company, 1937年、33頁)。移民の性格が基本的に異なっていたのである。

- (11) この問題を扱う場合、マレーシアの歴史をマレーシアの独立を境に、独立前の時期と独立以後の時期とに区分して考えるのが適切である。本稿で扱う問題すなわち、「3つのエスニック集団がさらされた「環境圧力」の大きな差とそれが企業経営行動に及ぼした影響」の問題が極めて鮮明な形で現れたのは、独立前の時期であるからである。独立前の時期は、英国植民地政府の下、インド人を手厚く保護した移民政策の他は、放任に近い政策が取られた時期であり、先に指摘した関係がかなり鮮明に表れていること、独立以後の時期は、逆に政治的ヘゲモニーを握った多数派マレー系の政府によって、マレー系を中心とする先住民を強力に支援する「先住民優遇政策」(いわゆるプミプトラ政策)がとられた時期で、この時期には、問題が政策によりかなり政治的に変形されていると考えられるからである。
- (12) 努力の必要がないほど環境に適応しているので、「過剰適応」とした。
- (13) しばしば引用されるナウル共和国の状況は、その典型といえよう。ナウル共和国では、アホウドリなど海鳥の糞の堆積によって形成されたリン鉱石の輸出により国家の財政が維持され、国家の収入を国民に支給していたため、国民は働くことを知らず、国民は怠惰な生活に落ち込み、町にはアルコール中毒者があふれていたといわれる。その後リン鉱石の枯渇により、同国は経済困難に陥っている。
- (14) この要求水準と満足水準とが、「有効圧力域」のレベルと幅とにどのような関わるかについては今後の検討に待つこととしたい。他の研究領域などでこうした分析が存在するかとも思われるが、当面まだ、そこまで筆者の検討は及んでいない。
- (15) Mahathir bin Mohamad., *The Malay Dilemma*, Times Books International, 1970年；高田理吉訳「マレー・ジレンマ」、勁草書房、1983年、77-78頁。
- (16) 注7「いばらの道」導入部分には、何事も神の思し召しとして気持ちを休めるマレー人のこうした姿勢を鮮明に描き出している。
- (17) 「理念圧力」のほかに適切な言葉が見あたらないが、わかりやすい例としては、青雲の志や共産主義の理想が若者たちを行動に駆り立てたことなどがその鮮明な例であろう。華僑の多くが望んだ「故郷に錦を飾る」、「成功して家族を呼び寄せ、彼らを貧窮から救い出す」などの理念は、華僑の経済行動・経営行動への努力と密接に関わっているように思われる。
- (18) 筆者自身の検討では、マレーシアにおけるマレー人・インド系移民の宗教意識は、特にこの点を鮮明に示している。
- (19) マレーシア科学大学准教授インタン・オスマン博士の2003年10月の日本福祉大学での講演により。
- (20) 問題を分かりやすくするために極端な例を挙げると、たとえば、切腹にも、命じられた切腹と自分の意思で行う切腹とがあり、この両者では、これら二つの「圧力」の作用の仕方が大きく異なっていると思われる。また日本の特攻隊の場合、かなり社会的圧力が強かった可能性があり、この点むしろイスラム原理主義者の自爆攻撃の方が、「理念圧力」に動かされている可能性がある。この点の証明は困難であるが、これら二つの「圧力」がどのように絡み合っているかは、興味深い問題で、この両者はしばしば、分かちがたく結びついている場合も考えられる。たとえば、環境の圧力が、たとえば「恥」の意識を媒介として「内圧」に変換された場合、これら二つの「圧力」は、分かちがたく統合される。
- (21) Mahathir 前掲書、高田理吉訳「マレー・ジレンマ」、49頁。
- (22) 岩田奇志「マレーシアにおけるエスニック集団の企業経営行動：比較分析—価値と「リソース」の

役割 (2003年度名古屋大学博士学位請求論文) 第7章起業経営行動の「型」を形成する諸要因：研究の総括、第4節ビジネスへのチャネリング参照。

Environmental and Mental Pressures on Urging Business Behavior

IWATA Kishi

Strikingly different business behaviors among three main ethnic groups in Malaysia impressed me very much. Analyzing the backgrounds of those differences, I found 'environmental pressures' among others, has played substantial roles on urging people exerting their efforts in economic and business activities. In early stages of economic development, 'pressures for survival' played significant roles. Later, 'environmental pressures' all around came to the front. It is exciting to know that the attitudes among each individuals and also ethnic groups are radically different. Therefore, a concept, that is 'interpretation code', is introduced in this paper. I have tried to establish an analytical framework in reference to 'environmental pressures', 'pressures caused by ideals' and their relations to business behaviors.